

「君をもっと知りたくない」

1

みあ(三月のパンタシア)

音のない夜。私は、手紙に記されていた場所に時間通り訪れた。

じやり、と砂を蹴る音が響く。辺りは物静かな空気がひっそりと佇んでいる。その夜闇に溶け込むように、そこには、この手紙の差出人であろう人物の背中があった。

「……手紙、読んだよ」

なんと声をかけるべきか迷いながらも、静寂の中、私はそれらしい言葉を探しその背に投げた。するとその人はゆつくりと振り返り、

ありがとう

と言っているような、

ごめん

と言いたげにも思える表情で、小さく笑った。

\*

2日前。私たちはシェアハウスのリビングに集まり、テーブルに料理とアルコールをふんだんに広げ、他愛のないおしゃべりに興じていた。

「タイヨウ先輩、このパスタ美味すぎですよ！ お店出せますっ」

そう聞こえながら、にやーちゃんはあさりのパスタをフォークにくるくると巻きばくりとした。

「にやーちゃん、ほんとにこれ好きだな。よし、俺が出て行く前に作り方伝授しちゃう」

「うわあ、先輩ひどいです。仁愛が料理死ぬほど下手なの知ってるくせに！」

にやーちゃんは、むむとした顔でグラスを取ると、自家製シャンデーガーフをくいと口に含んだ。頬を花びら色に染め、子供が拗ねるみたいに唇を尖らせるにやーちゃん。それに対し、あははと可笑しそうに笑うのは、この中で最年長であり、もうすぐ卒業を控えているタイヨウ先輩。その人工的な濃度の黒髪にも、ずいぶん見慣れたものだ。タイヨウ先輩は、大学に入学してから就活を始めるまでずっとファミレスのキッチンでアルバイトをしていて、この住人の中で一番料理が達人な人だ。食事は基本的に自給自足制だけど、不定期に開催される宅飲みでは、タイヨウ先輩が冷蔵庫の食材をかき集め、よく料理を振舞ってくれる。

「先輩、ほんとに出てっっちゃうんですか？ 仁愛たちの舌をこんなに肥えさせた罪は重い……っ」

「はは、そんなに気に入ってくれてた？ まあ、ここの学生限定だからね。ちゃんとレシビは残しておくから」

「うう、わかってるんですけど、さみしいじゃないですか。ねえカナ！ アキくん！」

隣に座っていたにやーちゃんが、ぎゅゅと私の腕にしがみついてきた。にやーちゃんの湯上がりの肌は水気を含み、しっとりとした感じがたまらない。

「そうだね、送別会は盛大にやろうよ」

肌と肌の触れ合う柔らかな温度を感じながら、私はそう言いながらにやーちゃんをなだめた。タイヨウ先輩は、見事念願のラジオ局から内定をもらっており、来年度から社会人になる。

「それはもちろんっ。タイヨウ先輩、覚悟しててください」

「え、なにやる気？ にやーちゃんのたくらみ顔がこわいけど、楽しみにしてるよ」

タイヨウ先輩はそう言い、人懐こい柴犬みたいな顔で笑った。あ、これはわりと本気で嬉しい時の笑い顔だ、と胸の内では思っていると、

「その時はね、アキくんが一発芸のひとつくらい披露しちゃいますよ！」

にやーははと笑いながら、にやーちゃんがアキくんの肩をぱしぱしと叩くから、タイヨウ先輩はまた笑みを深めた。

「ちよっと、なんで僕……それ絶対にスベらされるやつじゃないですか」

アキくんは呆れた顔をしているけれど、声には楽しげなものが含まれている。アキくんはくくつと小さく笑いながら、細長い腕を伸ばし2リットルのペットボトルを取ると、その琥珀色のお茶を自分のグラスに注いだ。この住人はお酒好きばかりなのだけれど、どんな時も一滴すらお酒を飲まないアキくんのために、宅飲みをする際にはウーロン茶が必須アイテムとなっている。

シェアハウスのメンバーは4人。入居を決めた理由もそれぞれだ。私は実家から通学するには少し距離がありすぎたため、大学入学のタイミングで一人暮らしを決意した。スマホで一人暮らし用の物件を

探していた時にこのことを知り、元々は一人暮らしを希望していたのだけれど、建物の綺麗さ、アクセスの良さに対する家賃の安さに胸を打たれ、深く考えるよりも先に指がすすすと動き、申し込みフォームに入力を始めていた。

今では私も大学2年生だ。入居当初はみんな他人だったのだけど、2年間も一緒に暮らせば自然と気の置けない間柄にもなってくる。などと勝手に感慨にふけっていると、アキくんのぼんやりした横顔が視界の隅に映った。

「アキくん、なんか疲れてない？」

そうこそりと尋ねてみる。アキくんは驚いたような顔で私を見ると、「はは、気持ちは元気なんですけど」そう落ち着き払った声で言った。

「実は、昨日までに提出しなきゃいけない課題があつて。それでここ数日夜遅くまで起きてたからかもれません」

「アキは今2年だろ？ 3年になるともつと大変になるよー」

タイヨウ先輩がアキくんの隣に腰を下ろし、後輩をおどすような悪い口ぶりで言う。

「そんな気がする」

アキくんが困ったように笑う。実際、タイヨウ先輩がいなくなつて一番さみしいのはアキくんなのかもしれない。アキくんはタイヨウ先輩の従兄弟で、タイヨウ先輩の紹介で入居してきた子だ。私とアキくんとのシェアハウス歴は同じく2年。つまりほぼ同じタイミングでここに来たのだけど、アキくんと初めて顔を合わせた時の、口角だけが引き上がったぎこちない笑顔はよく覚えている。ひと目で人見知りしていると分かった。後から聞いた話だけど、アキくんにとつて、シェアハウスという壁はかなり分厚く、入居を決めるまでに幾度とタイヨウ先輩に相談していたらしい。けれどやはり家賃面のメリツトと、幼い頃から慕っていた従兄弟の存在が抛り所となり、満を辞してルームシェアに踏み出したらしい。

今では私やにゃーちゃんにもずいぶんほどけた笑顔を見せてくれるものの、私たちがいくら「同じ家に住んでて歳も近いんだし、ため口でいいよ」と話しても、彼のくつきりとした丁寧な口調はなかなか崩れない。

そんなことをぼうっと思ひ返していると、うちの盛り上げ隊長のにゃーちゃんが突然「ああつ」と思ひ出したみたいに声を上げた。

「そうだ！ あれの続きやろうよっ」

にゃーちゃんは素早い手つきでスマホをいじると、ぴかぴかに明るい声で言った。

「謎解きっ」

彼女がゲームアプリを起動し、うふふつと悪戯好きの子どもみたいに笑う。にゃーちゃんのぼつてりした唇はきちんと保湿がなされていて、照明の下でうるんと光っている。その透명한唇にすっかり感心していると、「お、いいね」「やりましょう」と他のふたりがすっかり身を乗り出し、応戦体制に入っていた。このシェアハウスでは近頃、謎解きがブームなのだった。

きっかけは、さらに遡り1週間前のこと。

「はい、今から恋愛が問題だしまーす」

帰宅するや否や、右手にスマホ、もう片方の手に缶ビールを持ち、ご機嫌に酔った様子のにゃーちゃんが、リビングにいた私たちに語りかけてきた。

「おい、大丈夫か？」「にゃーちゃんお水ある？ 持ってる？」という私たちの声を華麗にスルーすると、彼女はコンと音を立て缶ビールを床に置き、勝手にテレビのポリウムを下げはじめた。私は若干はらはらした気持ちで、スマホをいじるにゃーちゃんを見ていたのだけど、そんな心配を笑い飛ばすみたい、彼女はやけに元気よく言った。

「大丈夫！ むしろ気分はハイですね。このアプリ、サークルの男の子に勧めてもらったんですけど、すつごく面白くて。というところで、みんなでやろうっ」

あの夜大盛り上がりして以来、ここでのブームは、Netflixの韓国ドラマから謎解きに切り替わった。すっかり夢中になったタイヨウ先輩は謎解き本まで買ってきたりして、私たちは顔を合わせればたびたび問題を解き合い遊ぶようになった。

主に出題役を担うにゃーちゃん。まわし役のタイヨウ先輩。さらりと問題を解くアキくん。手数は多いもののなかなか正解に辿り着けない私。

「こないだみたいに、解ったからって先に答え言っちゃわないでよお、男子ふたり！ カナがまさにあとちよつとでひらめきそうだったんだから」

「だって、初級問題にあんなに時間かけてたら日が昇りますよ」

「あ、謎解きやる前に、お酒作ろうか。カナちゃん何飲む？ つまみもまだ作れるけど」

タイヨウ先輩が私の空のグラスを指し、目元を柔らかく緩めそう言った。

「そうだ、飲もう飲もうっ。今日はカナの会なんだから」

と、にやーちゃんも顎を縦に揺らす。今日の集まりはにやーちゃんが企画してくれた。同性で同い年で、私が落ち込むとまっさきに声をかけてくれるのは、いつもにやーちゃんだ。

「いやあ、ありがたいなあ。こんなにお料理も作ってもらっちゃって。なんか、おかげで元気出てきちゃった。じゃあお言葉に甘えて、ハイボール作ってもらっていいですか？」

「了解ー！」

「でも、カナさんお酒そんなに強くないんじや」

アキくんがぼそりと言った。アキくんは言葉数があまり多くないぶん、一言一言に無駄がない。要するに、彼の言動はいつもの確だ。私がお酒に強くないというのも、もちろん凶星である。私は苦笑しながらも、しかしみんなの優しさが心に沁みてしまつて、どうしたつて飲みたい気分だったのだ。

「はい、お待たせ」

タイヨウ先輩がグラスを手渡してくれる。ありがとうございます、と受け取った時に一瞬、ハイボールの水面がぐわんと歪んで、私は軽く頭を振った。酔いが眠気に変わりかける時、よくそうなつてしまふ。私はまだもう少しだけ飲んでいたかった。

「今日は酔っ払って、泣いてもええんやで」

にやーちゃんが、そうこてこてのエセ関西弁で言った。にやーちゃんに、あの人の出身地の話をしたのなんてもうずっと前だ。だから、彼女はただおどけたノリでそう口にしたのだろう。けれどその何気ない口ぶりにすら、私はずき、と胸を軋ませてしまった。

あの人の関西訛りの優しい声と笑い顔が、まだ脳裏に鮮明に残っている。そしてこんな風に、ふとした瞬間まるで閃光のようにぱつと蘇っては、ゆっくりと消えていく。

その日、宅飲みが開かれたのにはわけがあった。

「あはは、でもこんなに慰めてくれる人がいて、ほんと助けられちゃったな」  
努めて明るい声を出したつもりだったけど、意識しすぎて逆に空元気な声がリビングに振りまかれた。

無理やり口の端を持ち上げながら、私は元恋人のことを考えていた。私が高校生の時に通っていた小さな古書店でアルバイトをしていた人で、4年近く付き合っていたことになる。せつせと勇気を練り固め、あの人におすすめの本を聞き出すまでに半年以上もかかったものだ。3つ年上で、彼の知識の豊かさやひっそりとした横顔に憧れ、するすると糸を手繰り寄せられるみたいに惹かれていった。一か八かで告白をして領いてもらえた時は、天と地がひっくり返るくらい信じられなくて、泣き出しそうなくらい嬉しかった。ずっとそばにいたかった。幸せを失うのがこわかった。彼に子どもだどとがっかりされなくなくて、彼に似合う人でありたくて、心も体も彼にびったり馴染ませようと努力した。彼が嫌がるようなことは決して行いたくなかった。いつだったか女友達に、「そんな気遣ってばっかで楽しいの？」と眉をひそめられたことがあったけれど、私はまごうことなき率直さで、「楽しいよ」そう返したことはまだ記憶に新しい。

先月、その彼に、別れを告げられた。彼が大学院に進んでからは研究室にこもりきりで、会う頻度自体は減っていたのだけれど、でも電話や連絡が途切れているわけではなかったし、それにもう大学生だし大人なんだから、そういう期間を経てより関係が深まったりするものなのだろう、と甘い寂しさをしたためていたのは私だけだった。

久々に会ったあの日、「これまでのような気持ちを抱けられん」と申し訳なさそうに言われた時、一瞬、なんの話か分からずにぼかんとしてしまった。暗がりのバーは品のいい音楽が流れていて、私は「この曲知らないな」と呟きながらスマホの音楽認識アプリに読み込ませたりしていた。人間、絶対に理解したくない。ことに直面すると一時的に思考を停止させられるのだと、この時初めて知った。けれど気まずい沈黙が続き、いよいよ耐えられなくなった脳みそがゆっくりと動き出した時、マグマが噴火したみたいなものすごいスピードで涙がこみ上げてきた。泣いちゃダメだ。直感が私にそう語りかけるから、私はぐっと眉間に力を込め必死に涙をひっこめた。すぐ泣く女の子は苦手だって昔言っていた。私は別れ話を切り出された状況に至っても、まだ彼に嫌われないための道すじを探していた。まだやり直せるはずだと思つた。

「なんで……」

私の弱々しい声は、口からこぼれるとそのまま沈黙の中に埋れてしまった。目の前が白く霞む。隣のお客さんの煙草の煙のせいとか、自分が朦朧としているせいとか、よく分からなかった。彼は目を合わせないまま、うん、と短く言った。何に對する返事？ 何を肯定しているの？ 何一つ分からなかった。彼だけが納得しているみたいでおそろしくて、どうにか彼の心を揺さぶるための言葉を探すのだけど、それは永遠に解けない謎みたいに、私には答えが出せなかった。私は、彼が期待する言葉を押し量ること

しかできないのだった。望まれている会話の筋は、私が「分かった」と頷くことだということは、分かっていた。

黙ったまま俯いていると、

「ごめん」

彼が曇った声で言った。待って勝手に終わらせないで、という切れ切れの思いで彼を見ると、彼は目を伏しグラスについた水滴を人差し指で気だるげに拭っていた。あ、と思った。それは彼が面倒くさがつている時にでる仕草だった。

その瞬間ふっとこめかみに細い電流のようなものが走った。この人はきつと、さつさとこの湿っぽいやりとりを終わらせ1秒でも早く去りたがっている、そう思った時、私の中で何かが爆発した。

「……めずらしいね、香水の匂い、するの」

自分の尖った声が耳元に刺さって痛かった。けれど口をつけて出てくる言葉を止められなかった。

彼の、半径1メートル以内に充滿する甘ったるい匂いに、気づいていないはずがなかった。彼に染みついた、柑橘系の甘さを煮詰めたような幼く可愛らしい香り。私の知らない香り。私でない別の女の子の存在をくつきりと立ち上らせる香り。

泣きたい衝動がせり上がってくるのを、歯で舌を噛み必死にこらえていた。彼が参ったように眉根を寄せるから、さらにかつとなり視界がぼやけた。

「そういう子どもっぽい香り、嫌いだと思ってた」

なけなしの作り笑顔でマイルドに毒づく自分に嫌気がさし、指先から少しづつ死んでいくみたいに体が冷たくなっていった。

「……好きな子がおる」

と、いう彼の声が耳に潜り込んできた時、彼と自分をつないでいた透明な糸が、ついにぷつりと切れてしまったのが、分かった。

どん、と水底に突き落とされたみたいに目の前が真っ暗になって、何も考えられなくて、どうしようもない虚しさが喉元を捉え息ができなくて、だけでもうさがる気力もでなくて——それから別れ際までは、私はもう何も言えずぎゅっと唇を引き結び、時間のかたまりに押し流されるままただ呆然と存在していた。

恋を失ってからの毎日は、ひとつのほつれからはらはらとほどけていく毛糸のセーターみたいな、私の心は少しずつ、バラバラに散らばっていった。ぐずぐずと崩れ形をなくし、次第に大学の授業もサボりがちになって、能動的働きかけをまったく失いかけていた私の心身を揺り起こすみたいに、ルームメイトが集まってくれたのだった。

「今日は飲むから！」

私は海中から息継ぎをするみたいに立ち上がると、ハイボールを勢いよく胃に流し込んだ。馬鹿みたいな一気飲みだったと思う。グラスは瞬く間に空になり、カランと氷がぶつかり合う気持ちのいい音が鼓膜に響いた時、ふらっと足元がぐらついた。

「わ！」

とタイヨウ先輩が叫び、慌てて両手を広げた先輩の腕の中に私はそのままダイブしてしまった。

「あはは、すみません」

「いや、やっぱり飲み過ぎかな、気持ち悪い？」

「いえいえ、大丈夫です」

「カナには私がいる！！」

「カナさん、タイヨウ兄はこうみえて意外とむっつりだから、離れたほうがいいです」

「お前、なんてことを！」

にやーちゃんの大変頼もしいお言葉と、それにアキくんがめずらしく冗談を言ったりするから、リビングにまた笑いが弾けた。

と、いうところまでは覚えている。

そこから記憶は飛び、意識の線がつながるのは翌朝、自室のベッドで目を覚ました時だった。

「ん……」

鼓膜を叩きまくるスマホのアラーム音で、まだくっつきたがっているまぶたをゆっくり持ち上げた。アラームを止め、カーテンの隙間から漏れる二月の鋭い朝日に目を細める。頭痛こそないが、首から上はやけに重たくて、体は果てしなくだるかった。ぼろぼろの全身には、昨晚のはしゃいだ名残がどつぷり残っていて、自分が酔いつぶれたのであろうことをすぐに思い至らせた。

「あー……みんなで運んでくれたんだろうな……申し訳なさすぎる」

誰に言うでもなく、掠れた声を絞り出し呟いた。半年以上放ったらかしにされ続けた、植木鉢の葉っぱみたいなくしゃくしゃな声だ。昨晩までは優しい気持ちで満たされていたのに、握り潰せば粉々に砕けて消えてしまいうような情けない声に、朝から無性に惨めな気持ちに襲われた。

「水……っ」

朽ちた肉体に気合いを通わせ、ゆっくり起き上がる。床に転がるトートバッグに手を突っ込み、半分飲んだままのペッドボトルを取り出すと、残りの水をごくごく飲み干した。傷んだ喉をぬるい水がさらさらと通過していき、ひとときの甘美を味わう。

「だる……」

水気を含んだぶん声はふくらむが、心は一向にしぼんだままだ。私にとって一限の授業は、疲労困憊で帰宅した時の入浴くらい、なかなか腰の上がらないことのひとつだ。

などと上がりきらないモチベーションを持って余っていた時、ひらりと足元になにかが落ちた。

「……手紙……？」

ブルーの封筒にはなにも書かれていなかった。宛名もない。覚えもない。私は奇妙に思いながらも、封のされていない手紙を開けた。

「……ええ？」

中には一枚の写真が入っていた。写真には、シャーペン、CDなど様々なものが映り込んでいて、その中央にはネコ柄の便箋が置かれている。便箋には文字が綴られているのだけど、

「あなたへの気持ちです……るみイト……？」

「るみイト」という文言の左隣には【？】が書かれている。ますます困惑しながら、私はもう一度封筒を確認した。すると裏側に「①」という数字と、小さく「カナ様」と書かれていることに気づく。ということは、おそらく私に宛てられたもので間違いはないのだろう。

「は、え、謎解き……？」

思わず素っ頓狂な声が、口から転がり出てしまった。いや、なにこれ。私はわけが分からず、まだ起き抜けの頭でただぼうっとその写真を見下ろしていた。

「ううん、しかもこの問題、簡単じゃないな……」

一見するだけではまるでピンとこないその写真を手に取り、逆から見たり横から見たり、適当に翻している、写真の裏面に、注釈めいた文章があることに気づく。

『封筒は、解いたら一通ずつ開けてください』

え、と辺りを見渡すと、床にはあと二通、同じ封筒が落ちていた。同様、小さく「②」、「③」と数字が記してある。

差出人の名前は書かれていない。

けれど経緯から考えて、ルームメイドの誰かが私に宛てたということだけは確かだろう。

ここにどんなメッセージが秘められているのだろう、という漠然とした思いは浮かび上がってくるものの、私の心の温度といえは上がるでもなければ下がるでもなく、正直、気持ちの大半を混乱が占めていた。

まず、どうしていきなり自作の謎解きを送ってきたのか分からないし、「あなたへの気持ちです」という意味深な一文に含まれているものが、冗談めいたやつか真面目なやつかすらも全く見当つかない。

けれど唯一胸の隅に引つ掛かったのは、ここに書かれている内容がどんなものであったとしても、おそらくこの人は自分と同じように、本当の気持ちを言葉にすることを苦手とする性質たちなのかもしれない、というどこか共感に似た思いだった。

「……とりあえず、解いてみようかな」

そうすれば、差出人の顔も判然とするのかもしれない。私は空のペッドボトルをゴミ箱に入れ、もう一度手紙を見つめ直した。

2

二月の冷たい廊下をつま先立ちで渡り、リビングに向かう。素足に床暖房の人為的なぬくもりを感じながらドアを開くと、キッチンの方から控えめな物音が聞こえてきた。

「おはよう、アキくん」

アキくんがコーンフレークの箱を片手でひっくり返し、さらさらとボウルに注いでいた。

一通目の謎は、解けた。「る」「み」「イ」「ト」という文字は、それぞれ写真の中にひとつだけ存在し

た。【？】はその左側に位置していたため、「る」「み」「イ」「ト」の左側にある文字を抜き出してみる。すると、浮かび上がってきたのが、

好きです

というメッセージだった。

私は少し体を固くしながら、ちらりと彼の横顔を伺う。

「カナさん。おはようございます。あの、昨日大丈夫でしたか」

「ああ、うん。昨日は、なんか久々に全員集まって飲めたから、弱いくせに嬉しくなっちゃって……後片付けもせずに潰れて申し訳ない」

いえ、と苦笑するアキくんの細い右手は、コーンフレークの箱から牛乳パックに持ち変えられていて、白いボウルを白い海で満たしている。私は戸棚からカップ春雨をひとつ取り、少しそわそわした手つきでプラスチックのふたを開けると、ポットからお湯を注いだ。あちち、とカップ上部を指先で掴みながらテーブルへ移動する。アキくんはさらにシェイカーを手に取り、牛乳と、どうもプロテインらしきパウダーを投入し淡々と振っている。そのチョココレート色に染まったシェイクとボウルを手に、私の向かい側の席に腰を下ろした。キッチン台に置かれたコーンフレークの箱に描かれている、オレンジのトラの陽気な笑顔が、私たちを静かに見つめている。

「アキくん、プロテイン？　なんて飲んでたのですな」

飲んでたのですな、などと使ったこともない語尾が口からこぼれ落ち、はっと息を呑む。意識をしすぎて、語彙がバグっている。緊張しているのかもしれない。

「そういうえば、親から送られてきていたのを思い出して……ちようど今試しに飲んでみているところです」

「そっか、偉いなあ」

「朝はあんま食えないんですけど、それで成長止まるのも嫌だと思って。カナさんは、それだけで平気なんですか？」

「あー、私も起きてすぐはそんなに食べられないからさ、でも大学着いてからちよこちよこつまんでる」「僕、生協の焼きそばパン好きですよ」

そう言いながら、アキくんがプロテインを飲みづらそうに喉に通している。その白い喉仏が遠慮がちに上下するのが、きつと好みの味ではないのだろうことを示していて可笑しい。アキくんとは時々大学の学食でもすれ違うことがあるけれど、うちの学食って量より質、みたいな健康意識の高いメニューが多くて、育ち盛りの彼のお腹はしつかり満たせているのだろうかと思ったりもする。

「あつそういうえば私、昨日自力で部屋に戻った記憶がないんだけど、きつと運んでもらっちゃったんだよね。ほんと、何から何までごめんね……」

私はそう言い小さく頭を下げた。春雨のカップを開けると、湯気のかたまりがふわんと立ちのぼってきて、私の顔を蒸気で包む。カップに口をつけスプーンをすすると、かきたまスープの優しい味わいがじわり胃に沁み、ほっと息を吐いた。

「ああ……いえ、完璧に熟睡してたから、運びやすかったと思いますよ。タイヨウ兄が担いでくれて」

「あ、そうなんだ」

「はい。カナさん、今日はこれからバイトなんですか？」

「ううん、大学。今日2限に試験あつて。早めに行つて範囲の復習するつもり」

大学によって様々だが、基本的に1月末から2月中旬にかけて期末試験が実施され、それを終わらせた者から春季休暇に入る。私は今日がラストの試験だ。

「えつ、まだ試験残ってたんですか?!　昨日あんなに飲んでしまつて、単位落としません……?」

「うん、なんとか、なる……!　過去数回、一限の試験寝坊して落としたことあるけども……今日は起きてるし、それに資料持ち込み可能な楽単だから、大丈夫でしょう。アキくんはそういうことなさうだよな」

「ええ、まあ、朝は強いほうですし」

「くう、ちゃんとしている……!!　じゃあさ、赤点とかないの?」

「はは、そうですね。一度も」

「アキくんは単位落とさないタイプの人間だなあ」

そう言うと、アキくんは声を出さずに笑った。つるつると春雨をすすりながら、黒目だけを動かしアキくんを盗み見る。彼はいたって平然とシリアルを口に運んでいる。

あれは、やはりラブレターなのだろうか、と私はとるととと食事しながら考えていた。内容が内容だし、ジョークや冷やかしてそんなメッセージを送る人たちではないだろう、とは思っている。が、そんなことは送り本人しか知り得ない。ていうか差出人、ほんとに誰?

「あの……、あと10分くらいでここ出ないと遅刻になっちゃいます」

アキくんがくぐもった声で言った。彼は私とは比べものにならないくらい生真面目で自立している。そもそもアキくんが実家を離れ、今の学校に通っている事情についても聞いているが、それだってよくその年で決断できたなとも思う。「ごめん、急ぎます」私は平謝りし、手早く朝食を済ませた。私とアキくんの目的地は同じなのだ。

最近、自分でご飯を作ることないな、と使った箸を洗いながらぼんやり思った。あの人と付き合っていた頃は、どんなメニューもそつなくこなすお料理上手に見られたくて、このシェアハウスで陰ながら猛特訓をしていたっけ。料理はやらないと確実に感覚が鈍る。今はレトルト食品やコンビニのお弁当で済ませてばかりで、ようやくきれいに巻けるようになっただし巻き卵も、きつと今はまたぐちやぐちやに焦がしてしまっただろう。

ハッと腕時計を見る。感傷に浸れる時間ではない。ぱぱっと手を拭き、私がばたばたとバッグに教材を詰める傍ら、アキくんがゆったりした手つきで、いつも着ている白シャツのえりを直している。アキくんは顔の造形は童顔の類だけど、そういったものを丁寧に扱う仕事は、実際の年齢よりもぐんと大人びた印象を与えたりする。

よく彼の隣にいるあの清楚な風貌の女の子にも、そんな風に触れたりするのだろうか。

「よし、私もう出れるよ」

やっと支度を終えた私は、悠然と頷くアキくんと一緒にうちを出た。

同じ時間に通学するのは結構久々だった。そういえば以前、ふたりでシェアハウスを出た瞬間に出くわした友人が、「カナ、弟いたの??」と聞いてきた時は笑ってしまった。どうも私たちは雰囲気か姉弟じみているらしい。

シェアハウスから駅までは徒歩3分。小さな公園を通り過ぎると商店街に出る。商店街はバレンタイン仕様の甘い装飾がほどこされていて、何だかむかつくくらいに浮かれている。私たちはとくに会話を交わすでもなく、淡々とその短い距離をこなした。

ふた駅ぶん電車が揺られる間、アキくんがすうっとポケットからスマホを取り出しネットニュースを流し見はじめたため、私も電子コミックの続きを読むことにした。アキくんの、むきたてのゆで卵みたいにつるんとした肌を横目で見ながら、私なんか夜更かし続くとすぐ肌に出るのに羨ましいな、などと感心していると、

「カナさん？ 駅、降りなきゃ」

そう声を掛けられ、ふっと我に帰った。電車ってひとりで乗るよりも、誰かと一緒にのほうが数倍時間が短く感じられるから不思議だ。もう大学の最寄駅に到着していた。

「あーごめん！」

へへへとスマホをバッグにしまい、人ごみに流されながらホームへ降りた。

改札を出ると、ぼんやり目を伏した眠たげな学生たちが一気に増え、私たちもその群れに混じり歩いた。隣の知らない男子学生からあくびが伝染し、私もふわあと白い息がこぼれる。この人も今日テストなんだろうか、眠たさそうだ。

この駅で降りる私服姿の若者たちは、おそらくみんな同じ大学の生徒だろう。この辺りではうち大学のみが独立して存在しており、また周辺を見渡してみても他大生がわざわざ遊びにくるような施設もない。にーちゃん大学の大学もタイヨウ先輩の大学も、渋谷や吉祥寺が徒歩圏内で、時々心から羨ましく思う。

正門横のコンビニ前を通ると、壁に貼られたポスターの中で、きらきらしたアイドルたちが愛くるしい笑顔でチョコレートを作っているのが目に付いた。またひやひやしたもののが心のふちに触れ、私は軽く頭を揺らす。シングルにとつての2月とはこんなにも憂鬱なものだっただろうか。

「あの、じゃあ」

アキくんの声に、弾かれたように顔が上がった。私たちが目指す教室は真逆に位置する。アキくんはすでに私に半分背を向け、反対方向に向かおうとしている。

「うん、じゃね……あのさっ」

「はい？」

「……ええと、なんでもない！ じゃつ、アキくんも頑張つて」

手紙のことを探ってみようかと思っただけで、さりげない言い方が思いつかなくて、私は誤魔化すみたいにぶんぶんと手を振った。口からこぼれた息が白く、私たちの間を線のようにゆらゆらと漂っている。アキくんは小さく会釈をし、去っていった。

うちの大学は敷地が広く、アキくんと遭遇する機会ほんの時々だ。蔵書の多さ、ジャンルの豊かさを誇る大学図書館が彼のお気に入りようで、人と人の間をすいすいとすり抜けてゆく姿を稀に見かける。

見かけるからと言って、声を掛け合いおしゃべりを楽しむでもなければ、授業終わりにそのまま遊び

に出かけるようなこともない。「今日も猫背だなあ」とそのシルエットを傍観して終わることがほとんどだ。そもそも、アキくんはたいがいヘッドホンを装備してビートを刻むように颯爽と歩いて行ってしまおうし、もしくは隣を歩く子と熱心に話し込んでいたり、なにかコンタクトを取ろうにもできないことのほうが多い。

ビートといえばアキくんは最近、いわゆるネットミュージックと呼ばれるジャンルのものを好むらしい。「ネットでたまたま見つけた音楽にすっかりハマって。もともとポカロ文化とか好きだったので、音数の多いサウンドとかは刺さるんだと思います」と話してくれたけど、どうしてそんな話題になったんだっけ。

自習室に入り、ぐるりと視線を泳がす。友人の姿はない。一緒に勉強する約束をしていたのだけど、朝に弱い彼女はまだ到着していないみたいだ。

隅の席に腰掛ける。なんとなく、私は周りをこそそこそと周りを確認したのち、そつと二通目の手紙を開けた。

今度は手書きのカードが一枚入っていた。迷路？ みたいなものが描かれていて、道の途中にはアルファベットだったり、音符やラジオやネコなどのマークだったり置かれている。もしてまたしても文字の表記。「日付」、「時刻」。要するに、日時が答えになっているということ？

ぶぶ、とテーブルの上でバイブ音が鳴り、ハッと意識が自習室に戻された。スマホの画面は、友人からのメッセージ受信を通知している。「ごめん、今起きたっ。ダッシュで向かう」という文言を確認すると同時に、ずいぶん長い時間手紙に集中していたことに気づき、私は慌てて教科書を広げた。その時、教科書の間からはらりと紙切れが落ちた。ライブの半券だった。

ああ、ライブ、そうぼつりとこぼれそうになった眩きを、私はどうにか口の中だけに留め、それはやがて胸の中に収まっていった。そうだった。昔、あの人と行く予定だったライブに、アキくんに行ったことがあった。その時に、好きな音楽の話もしたんだ。

「ごめん。研究終わらんで、ラボ抜けられんようになってな」そう電話で伝えられ、夏だというのにスマホを持った指先が冷えびえと痛かった。行けないかもしれない、というのはいちどもとお互い承知の上での約束だった。むしろ行けない可能性を含みながらも一緒にチケットを買ってくれたことに感謝したいくらいなのだけど、それでも私も彼も好きなバンドのライブだったから、やっぱり彼とふたりで音楽を分かち合いたかった。

「俺のチケット、行けそうな子に渡してくれてええから」

「ん、わかった……！ 研究がんばってね」

笑顔の名残を電波に残したまま、私はそつと通話を切った。

「さみしい」と、素直に言えたらよかったのだろうか、と今になってふいに思うことがある。「ふたりで行きたかったな」とか、「早く会いたい」だとか。それは紛れもない本心でありながらも、私は、そういつた本音を口にするのが苦手だった。素直になるのは怖い、と思う。それは自分が相手に執心しすぎてしまう性質なまだというのを理解しているからこそであり、その気持ちを受け入れられなかったり、否定されてしまったらと思うと怖くて、私はいつも当たり障りのないきれいな言葉ばかり選んでしまう。

「インディーズのバンド、ですか。名前は聞いたことある気がするけど、曲は全然わからないです」

あの時、ちょうどキャンパスですれ違ったアキくんは、私は思い切つて声を掛けた。

「うん。でもすごくいいバンドだよ。もし少しでも興味と暇があれば」

「じゃあ、行ってみたいです。ありがとうございます」

そうして音楽に関心の高いアキくんに付き合ってもらい、好みの音楽の話題以外にも、少し込み入った話もした。

「……義母は、いい人なんですけど、急に新しい母親ですって言われても、うまく受け入れられないし、どう接したらいいのかもわからなくて。それで、周りにきつく当たったりしてしまつて。そういう自分も嫌で、とにかく早く家を出たいと思つてたんです」

そのライブの帰り道に初めて、アキくんが地元を出て東京の学校に進学した理由を知つたのだった。

「そつということがあるって、今のところへの受験を決めました。いわゆる有名校だし、心配しつつも最終的には父も義母も賛成してくれて。それも、タイヨウ兄が説得してくれたのは大きかったですね。自分が面倒見るからって。そしたら運良くシェアハウスに空きが出て」

「そつか」

私たちはシェアハウス近くの公園に寄り道をし、そんなことをぼつぼつと話しながら、外灯の明かりの下を縫うように歩いていた。

「ごめん、普通に寝坊した……」  
友人のひそひそ声が頭上に降ってきて、過去に遡っていた意識がじわじわと現実に戻ってくる。  
「オハ。起きてよかったね」  
私も秘密話をするみたいに囁き返す。隣に腰を下ろした友人は寝坊の常習で、今日も低血圧がキマッている。

眠気と戦う友人を横に、私はシャーペンをくるくる弄りながら、ぼうつと窓の外を眺めてみる。自習という名目で来たものの、手紙のせいで全く集中できない。

アキくんをキャンパスで見かける際に、よく彼のそばで微笑んでいる女の子がいる。タイヨウ先輩のバイト先の後輩らしいのだけど、いつだったか、タイヨウ先輩に問柄を問われたアキくんは、顔だけじゃなく耳まで赤くし、ごによごによと言葉を濁していた。そのうぶな反応には、その場にいた全員が微笑ましく思ったものだ。あの子って、やっぱりアキくんの彼女なんだろうか。

と、記憶をひとつずつ並べて物思いにふけっていると、ざわざわした物音が耳元で揺れた。直後、授業終了を告げるチャイムが鳴り響き、自習室にいた学生たちは次々と立ち上がり、私たちの前をぞろぞろ通り過ぎていく。

「私たちも行くっか」

そう語りかけた時、ぶぶ、と鈍く震えた音がパーカーのポケット内で鳴った。

にやーちゃんからのLINEだった。『カナのカップスープひとつもらっていい？ あとで買い足しくからっつ』という文面が、にやーちゃんの甘えた調子の声でそのまま再生される。私は『いーよん』とだけ返信し、ついでに適当なスタンプも送っておいた。

おや、とそのままスマホに目を落とす。もう一通、別にメッセージが届いていた。こっちはもう少し前に送られていたみたいだ。

「……ほう」

動物のうなり声みたいな、低い声がこぼれ出た。

『今夜、もし空いたら付き合っしてほしいところがあるんだけど、どうかな？』

タイヨウ先輩だった。意外な人物からのめずらしいお誘いに、しげしげと画面を見つめながら、私は脳裏にスケジュール帳を広げる。

『はい、大丈夫です』

そう素直に返信した。直後、まるで卓球のラリーみたいにすぐさまスタンプが返ってきた。彼の忠実に感心しながら、私はタイヨウ先輩がよく使う猫のスタンプを、しばらくじっと見下ろしていた。

3

「すみません、お待たせしました」

約束の時間の3分前に新宿駅東口に着くと、すでにタイヨウ先輩の姿が見え、ぺこりと頭を下げた。

「いや、俺が早く着きすぎたな」

「えっと、画材屋さんですよ」

「うん。今日はよろしくお願いします」

タイヨウ先輩はそう人の良い笑みを浮かべ、私たちは画材屋を目指し歩き出した。小さな電飾がちかちかと光る街なみに、ふたたびバレンタイン・ブルーを盛り立てられながら、

『妹の誕生日になにか贈ろうと思ってるんだけど、選ぶのを手伝ってほしくて』

というタイヨウ先輩からのメッセージを、頭の中でなぞっていた。  
「いやあ、急な頼みごとだったのに、ありがとうね。本当はもうちょつと早く準備したかったんだけど、でもほら、俺先週の土日インフルでくたばってたじゃん？」

迷惑かけたね、とタイヨウ先輩が両手を合わせる。先週、高熱で呼吸を荒げるタイヨウ先輩に、私にやーちゃんでおかゆを作った夜のことを思い出した。

「そうでしたね。タイヨウ先輩、きっちり5日で全快するのすばらしいです。あ、というか、昨晚はすみませんでした……」

「ああいやいや。でもカナちゃんこそ次の日にはさっぱりしてるのがすごいね。にやーちゃんが心配して、部屋に様子見に行っただけだったのに」

「えっ……、あっそうだったんですか」

タイヨウ先輩が普段と変わらない気さくさで笑う。先輩のさらりとした発言。それにより、昨晚私の部屋に訪れた可能性のある人物が、もうひとり追加された。

「にやーちゃん、か……」

「え？」

「ああ、いえ」

あのシェアハウスで、私の部屋を訪れる頻度が一番高いのはにやーちゃんだ。

では、もし仮に。タイヨウ先輩が、私を運んだついでに手紙を置いていったとしたら。だとしたら、にやーちゃんはきつと手紙を目にしたことになるけれど……。

私は心の中で首をひねった。

私の中でいろんな辻褃がどんどん合わなくなっていく。だって私は、タイヨウ先輩は、にやーちゃんを気にかけているのだと推し量っていたからだ。

「……妹さん、たしか高校生でしたっけ」

様々な憶測はいったん心の裏側に押しやり、私は話を続けた。タイヨウ先輩とふたりで出かけるのって、いつぶりだろう。たいていにやーちゃんやアキくんも誘うのにな、ともぞもぞ考えていると、私の頭の中を透かして見たみたいなのに、タイヨウ先輩が言った。

「ああ、うん。なんか、アキにも声かけたんだけどバイトだって断られて」

「そっか、確かにそう言ってたかも」

「あ、今朝会った？」

「はい。なんかプロテイン飲んでましたよ」

「マジ？ ははは、そっかそっか」

タイヨウ先輩が、従兄弟というより兄、いや、父性のようなものを顔に滲ませくすくす笑っている。本当に、彼は天性の面倒見の良さを持ち合わせた人だ。

「で、うちの妹、絵を描くのが趣味みたいでさ。絵というか、イラストって言えばいいのかな。よく書いてたから」

「なるほど、それで画材屋さんか」

「うん。なんていうか、俺文具って正直全然こだわりなくて、自分は結構直感で選んじゃうけど、女性はどうなんだろうとか思ってたさ」

タイヨウ先輩は女の人のことを、「女」と言わず「女性」と必ず言う。その律儀さを私はなんだか素敵に思う。

「あつ、だったらにやーちゃんが詳しくあったかも。あの子、バイト先の黒板によくファンシーな感じの動物とか書いてて、うまいんですよ。いつかペンケース見せてもらったときも、いろんな種類のペン入れてて」

「へえ……そうだったんだ。ていうか、あの喫茶店のバイト、ふたりともけつこう長いよね」

「そうですねえ。お店もオーナーも最高です。というか画材屋行きたい、って聞いた時点で、にやーちゃんに話振ってみればよかったですね」

「いやいや、こっちが勝手に誘ったんだから。せひカナちゃんの感性でアドバイス頂ければ！」

タイヨウ先輩が左耳のピアスを指でもてあそびながらぐいっと口角をあげた。「はい！」私もつられて語尾にビックリマークをつけて返事すると、先輩は朗らかに笑った。無意識にピアスや耳を触る癖のある人は、そうすることで頭の中を整理していることがある、と言っていたのはテレビだけ、ラジオだけ。

お店に向かう道すがら、私は頭の中でそつと手紙の内容を思い浮かべていた。

二通目の謎は、ここに来るまで時間を潰していたファミレスで解けた。矢印で示された指示通り迷路を辿ったり、塗り潰したり試してみると、「Valentine」「20」というメッセージがあぶり出された。これがどうやら日時を示しているらしい。

そして、私はついに最後の手紙も開いた。

三通目の封筒に入ってたのも、同じく手書きのカードだった。けれど、二通目のものと比べると内容は100倍シンプル。「場所」という文字と、音符マーク、矢印、アルファベットのK、のみしか書かれていなかった。ファミレスにいたの間には解ききれず、今も頭の隅で推察は続いているのだけど、なかなかピンとこない。

そうやって、ここまで提示されるがままに謎を解いてきたものの、肝心の差出人が誰かというのは正直さっぱり分からないままだった。まず筆跡という点では、全く判断ができなかった。一緒に住んでいても、意外と書き文字を目にすることは少ないのだなというのは、この手紙をきっかけに初めて感じたこともある。唯一よく目にするのは、にやーちゃん。バイト先の黒板に、チョークでおすすめメニューを書いたりしているからだ。けれどこれまで筆致に注目したことなどなかったから、「にやーちゃんの手」というものをうまく思い出せない。たとえば、可愛らしい丸文字だったりすれば印象に残っていたかもしれないのだけど、臍げな記憶の中に浮かぶ彼女の筆跡は、クセのないしゅつと整った感じの文

字。

手紙の文字も、丁寧できれいな筆致だった。だけど、それがヤーちゃんの字と一致するかどうかと言われると、私は小首を傾げることしかできない。

それに、差出人の正体を知ったとして、私はこの手紙にどう応えようとしているのだろうか。

元恋人のことを引きずっているわけでは、ない、と思う。はつきりと断言できないのは、どうしてもヨリを戻したいとか燃えるほどの未練はないものの、ただ、日常のあちこちにぼつぼつと灯るあの人の記憶ばかりがふいに蘇り、時々心だけがまだ過去を生きているような気持ちになるのも否めないからだ。

これがどういう心の状態なのか、自分でもよく分からない。いや、分かりたくないのかもしれない。この思いを掘り下げれば下げるほど、心に空いた冷たい穴がより深くなっていく気もして、考えるのを止めてしまう。空虚というのは突き詰めれば突き詰めるだけ虚しさが深まるのだからやっかいだ。だから、私は現実から逃げるみたいに考えることを放棄し、ただぼんやりと日々をこなしている。

だけどいくら逃げ道を探しても、見えない糸がやわやわと胸を縛り付け、それが私をしみじみと物悲しくさせ、結局、私はどこへも行けず、同じ場所ですつとうじうじしているのだ。

「うわ、初めてきたけど、門構えからめっちゃめっちゃ本格的だな」

人ごみの間をぐぐり抜け、駅から10分ほど歩いたところにお店はあった。

「私も初めてです。でも、この赤茶色の壁がレトロな感じで素敵ですね」

「女子はレトロって好きだなあ」

「わ、急におじさんっぽいです」

「マジかあ。舌引っこ抜いてくるわ」

「幸運を祈ります」

私たちは軽口を叩きながら扉を押し開けた。タイヨウ先輩と親しくなったのには、ラジオ、という共通の趣味が影響している。

ちようど半年ほど前だっただろうか。にゃーちゃんが、「最近寝付きが悪い」とリビングでぼやいた夜のこと。私の高校時代からの睡眠導入法として、ラジオ番組を流しておくことをおすすめていたのだけど、

「えっ、カナちゃんも“ミッドナイトニッポン”聴いてたの??」

タイヨウ先輩が、そう勢いよく振り返ったのだった。

ラジオは好きだ。とくにミッドナイトニッポンはヘビリスナーで、月曜から土曜まで帯でやっている番組のだけど、私はそのほとんどをチェックし聴取している。

「へえ！ なんか意外です」

にゃーちゃんが大きな瞳をぱちくりしながら言った。たしかに、タイヨウ先輩はラジオを聴いて盛り上がる姿よりも、どちらかというと、インスタに友人たちと指で作った星の写真をアップしているような姿のほうが想像つく。

「うそ、俺もミッドナイト大好き。好きなパーソナリティの曜日を基準にバイトのシフト出してるもん。リアタイしたくて」

「おお、ガチですね。あれ、今シフトって……」

「土曜の深夜はたいがい部屋にこもってる」

なるほど、と私は深々と首を縦に振った。私も大好きな曜日で、思わず心がジャンプしたものだ。そのやりとりをきっかけに、とくに神回だった翌日などは、ラジオの話題に花を咲かせたりと、もともと親しみやすい性格のタイヨウ先輩とより仲良くなれた気がする。とくに、

「時々メールも送る。読まれないことが断然多いけど」

とこっそり教えてもらったときはひとときわ盛り上がった。

「そうなんですか。え、ちなみにラジオネームは？」

「“とんがり公園”」

「えっ」

その名に、私はすぐにピンときた。とんがり公園さんは、常連の職人とは違うけど、時々ひよこつと現れては印象深いネタを投下していく人物で、名前の語感の良さも含めて記憶に残っていた。

「あつ！ じゃあラジオネームの由来って……」

「そ。うちのそばの公園から取った」

私は近所の公園の、黄色い三角屋根のついたアスレチックを思い浮かべた。

「あれ、とんがりコーンみたいじゃない？」

ちよつと照れくさそうに教えてくれたタイヨウ先輩との会話は、今でもよく思い出す。

タイヨウ先輩とはラジオの話題以外にも様々な話をするようになった。彼は、さも自然に相手の心に

滑り込むことのできる人で、しかもそれがちつともいやらしくないから、私を含めみんなからよく相談を受けていたように思う。だから、

『俺、正直進路ちよつと迷ってて。ラジオ局って、やっぱり人気もエグいしさ』

と、めずらしくタイヨウ先輩の方から相談してくれた時は、私は心から真剣に耳を傾けたものだ。先輩は笑っていたけれど、どこかやつれたみたいなお青白い横顔をしていて、就活の大変さも不安も、手で触れそうなくらいリアルに感じた。けれど私は、先輩のラジオに対する愛情も熱量もひしひしと感じていたし、それに無責任と言われればそれまでだけど、私にはタイヨウ先輩はきつとうまくいくという根拠のない確信があった。だから、

「私は、きつといい方向に進めるって信じてます」

そうはつきりと伝えた。彼は、「夢をかなえる」という目的に振り回されて、本当にやりたいことを見失うような人じゃない。

「カナちゃんの言葉って、なんでかすつと響いてくるよね」

彼は笑うと目じりにしわが集まって、より優しい面立ちになる。タイヨウ先輩のまつすぐな言葉が照れ臭くて、「へへ」私はわざとらしく頭を掻いておどけてみせた。

そしてものすごい倍率をくぐり抜け、本当に達成するタイヨウ先輩は、やはりとてつもなくすごい人だと思う。

「カナちゃん、色鉛筆ってどう思う？」

背中の方からタイヨウ先輩の声がして、私の回想は途切れた。タイヨウ先輩が何色もの色鉛筆がずらりとバラ売りされているコーナーを指差している。

「賛成です。今は大人の塗り絵も流行ってますし、長く使ってくれるんじゃないかと思えますよ」

「ほう、そうなんだ。でも種類ありすぎて迷うな。12色、36色、72色セットってのもあるのか。純粋に本数が多いほうがいいよな。うわ、これなんかはどう？」

タイヨウ先輩がブルーの平缶を手を取った。

「プロも愛用！」ってポップに書いてありますね。へえ、芯が細いから、緻密なところまで線が届くんですって。この72色セットのサイズ感だと、ギリギリ持ち運べていいですね」

「なるほどなあ。じゃあこれよりデカくならないほうがいいわけね。あ、ちなみに、それって人気なの？」

タイヨウ先輩が“売れています”とポップに説明された別の商品を指差し訊いた。

「あっ、ちょうどこの間テレビでやってました。鉛筆自体のデザインもかわいいですよ。たしか削りかすが花びらの形になるとか」

「ほう！ あ、でも5色しかないのか」

「ですわね。なので、こっちはちよつとしたギフトなんかにぴったりなんだと思います。私だったら、お誕生日のプレゼントは、さつき選んでたほうをおすすめしますよ」

「おっけー。じゃあそれにする」  
タイヨウ先輩は素直な小学生のようにこくと頷くと、いったん手にとってみた花びらの色鉛筆をそつと戻した。

「あ、俺自分のシャーペンも買いたい」

とタイヨウ先輩がこぼした時、私の脳は生まれ変わったみたいに冴え、ハッと閃いた。

ここで、タイヨウ先輩の筆跡を見られるではないか。

「はい、ぜひ見ましょう」

私は、手紙の流麗な文字を頭に浮かべながら、そう念入りに呟いた。

色鉛筆売り場と比べると、ささやかに広がるシャーペンコーナーでタイヨウ先輩が適当に手に取ったものを試し書きしている。

「うお書きやすっ。これにしよ」

タイヨウ先輩はメモ用紙に「あ」の一字だけをさらさらと書くと、即決定してそのままレジに向かうとするから、私は、

「……こういうの、メッセージとか残していったりしません？」と、より明確に文字を判定するための

言葉が脳裏をよぎったのだけど、でも、

「綺麗なひらがなですわね」

やっぱり違う言葉を選び、レジ列を指す先輩を片手で見送った。

筆跡、というひとつの手がかりから全てが明らかになったとして、私はどうするのだろうか。

だんだん、相手が誰であろうと、どんな想いであろうと、今の自分には、きつときちんと受け止めきれないであろうことを、私は感じはじめていた。

恋を失ったことで死んでしまった自分の気持ちを、私はまだきちんと始末ができていない。お墓を掘って、そこに埋めてあげられたらいいのだけど、それがどうもうまくできないのだ。その重くて苦いものが、ずっと胸に残り続けている。それに、どんな恋だってきつといつかは亡くしてしまうのなら、もう、地獄の底に落とされるみたいな、死刑宣告を受けるときつといつかは亡くしてしまうのなら、もう、だから、新しい気持ちに触れることに、あまり前向きにはなれないのだった。ここまで手紙を読み解いてきたものの、今になって、差出人の正体を知ることには私はどこか恐れを感じていた。だってその人物の想いをどう扱っていいのかわからない。その人物とのこれからの関係はどうなってしまうというのか。

私は失恋の痛みからも逃げ、そしてこの手紙からも逃げようとしているのだった。

画材屋を出ると、そのまま近くの喫茶店に入り、夕飯をこちそうしてもらおうことになった。私は喫茶店のナポリタンをこよなく愛しており、タイヨウ先輩がおすすめのお店に案内してくれた。

「うわ、すごく好きなこつてりです。美味しい」

「それは良かった」

「そういえばタイヨウ先輩、シャーペン決めてレジに向かう途中、また色鉛筆のコーナーに戻ってましたけど、他にも何か買われたんですか？ スケブとか？」

「……へ？ ああ、まあ？」

タイヨウ先輩がやけにしどろもどろになるから、「はあ」と私もりんかくのぼやけた返事をしてしまった。

「ああ、そういえば、昨日のミッドナイト、神回だったよ。多分まだ聴いてないと思うけど」

タイヨウ先輩が明らかに話題の舵を切るから、私はその空気を読み取りその進行方向に話を委ねた。

「え、ほんとうですか。リアタイしたかったな」

そう乗じると、タイヨウ先輩は途端に楽しげな光を目に宿らせ、いつもみたいに朗々と話してくれた。先輩の形のいい耳が、ほんのり赤く染まっているのをそつと盗み見しながら、私は彼のおしゃべりに相づちを打っていた。

シェアハウスに帰宅すると、リビングの電気は点いていなくて、ふたりともまだ帰っていないみたいだった。私は先にお風呂を済ませると、そのまま自室のドアを開けた。

「はあ……早起きすると一日が長い……」

壁掛け時計は22時すぎを示している。いつもならまだリビングで談笑している時間だけど、久々に朝早かったのと、一日中いろんなことを思案していたせいか、お風呂から上がった私の体と脳みそは、すつかり入眠の準備を始めていた。

部屋の電気を落とし、間接照明の明かりだけ小さく灯すと、私はベッドにもぐりこんだ。

その夜、私は夢を見た。

夢というのは自分の無意識下にある、忘れかけていたはずの事象をも、まるで自然に像を結ばせてしまうから不思議だ。

久々に見た、元恋人の夢だった。それも、実際の思い出とかなり近い、過去を遡って見ているような夢。

夢の中の彼と私はまだ付き合っていて、それも、初めてふたりで出かけた昼の海辺にいた。そのふたりを、私は神のような視点で、YouTubeでも眺めるみたいにぼうつと俯瞰していた。

私は、両手いっぱい色とりどりの小さな貝殻を抱え、大切そうに眺めている。彼に見せると、貝殻の輝きを瞳に反射させた彼が、あの大好きだった笑い顔で微笑む。嬉しくなって、はしやぐ私は白い砂浜に足を取られ、よろけてしまうのだけど、彼がぐつと腕を引き寄せてくれる。ふたりは無邪気に笑い合っている。私、あんなにも彼に全てを捧げる気だったのに、どうしてうまくいかなかったのだろう。それに、今さらこんな懐かしい夢を見るなんて、私はやっぱりいまだに彼を忘れられず、心のどこかで恋しくなど思っているのだろうか。

分らない。ただなぜか、物悲しい気持ちがひたひたと満ちて、目尻から温度のない雫があふれ出すのだった。

アラーム音が夢の中に忍び込んで、目を開いた。まだ夢の景色がまぶたの裏に残っていて、残像は一粒の丸い玉になり、押し出されるみたいに目からこぼれ、頬を濡らす。

スマホを確認する。時刻は9時。新しいメッセージは届いていない。私はSNSを開くでもなく、ロッ

ク画面の日付をただぼうっと見つめていた。

「うわっ……!!」

やがて追加設定していたアラームが鳴り、慌てて解除すると、私は目元を拭い自室を出た。

「あ、カナおはよ〜」

「おはよ、にゃーちゃん」

リビングでは、にゃーちゃんが鏡と向き合い、目の下にきらきらのアイシャドウをのせ涙袋を書いていた。

「カナ、相変わらずギリギリに起きるねえ」

「ん。きのうは早くに寝てただけで、でもなんか眠り浅くて。夜中何回も目が覚めちゃってさ」

そう呟くと、にゃーちゃんは手を止め、ラメよりきれいな光を生み出すその真っ黒い瞳で私を見上げ、言った。

「今日、バレンタインデーだもんね」

手紙の差出人、3人目の候補者とされるにゃーちゃんが、うつとりと目を細め、微笑んだ。

4

にゃーちゃんの、何かを含んだような笑い顔にどきりとしながらも、

「だねえ」

と、私もファンデーションを塗り伸ばしながら、平然を装いそう返す。

「イベントごとは店も忙しくなるでい。看板娘の私たちで、売上伸ばしてこ」

にゃーちゃんが小さな唇に桜色のグロスをのせ、えいえいおー! と意気込んでいる。

「私たち看板娘だったの?」

「そーだよん。看板娘だよん」

「うそ、どうしよう。私、リップ切らしてるんだった。看板娘なのに……」

「看板娘なのにい??」

ぷっ、とにゃーちゃんが吹き出し、私たちはきやらきやら笑い合った。朝の支度をしながらするくだらない会話って、高校の休み時間、友達とトイレでアイラインを引きながら交わしたおしゃべりの風景を蘇らせる。

「しゃーない。仁愛が塗ってあげる」

へ、と振り向くと、にゃーちゃんはすでにリップグロスのキャップを開け、さあ任せろと言わんばかりに構えていた。

「カナはオレンジが似合うね。はい、少しだけ唇開いて〜」

がっちり正面を捉えられ、私は言われるがまま軽く開く。にゃーちゃん目の視線が私の唇に集中する。私はなんとなく視線を散らす。

「そーなの?」

「うん。顔がおしゃれだから」

にゃーちゃんがよく分からない理論を述べながら、下唇にそつとブラシを押し当てる。「おお、やっぱ似合う〜」にゃーちゃんが口ずさむ甘ったるい鼻歌が、テレビから流れてくるコメントーターの声の隙間をふわふわ泳いでいる。

あの手紙の差出人であるかもしれない、にゃーちゃん。

とはいえ、とはいえである。にゃーちゃんは女の子。私も女の子。

それに、彼女は恋人がいる。

「にゃーちゃんはさ、」

「あっ、ぶな! 急にしゃべるから危うくグロスよれるところだったあ。間一髪。でもちようど完成した! 似合ってるにゃ」

にゃーちゃんが手鏡で私の顔を映す。甘酸っぱい果実みたいなオレンジ色が、品良く唇に色づいている。

「にゃーちゃん、ありがと」

「うい! これ、今夜返してくれたらいいよん。じゃ、そろそろ急ぐ。まったりしてたら意外といい時間だった」

「うわ、ほんとだ。出よつか。グロス、ありがと」

にゃーちゃんからリップグロスを受け取り、ポーチの中にしまう。今夜、というワードの余韻が耳の奥で反響する。しかし私は調子を変えず、リビングの照明を消して部屋を出た。

「今日のごはんなんだろう」  
電車に隣り合わせて座るにやーちゃんが、斜め上のあたりに視線を泳がせながら言った。彼女は今、理想のブランチを空想しているのだろう。

私たちのバイト先は隣駅にある純喫茶で、11時オープン、19時クローズの個人が経営しているお店だ。オーナーが開店前にまかないを振舞ってくれるのだけど、“食事とコーヒーが美味しい喫茶店”として有名なだけあって、私たちはすっかり胃袋を掴まれている。

「ていうかカナ、さっきなんか言おうとした？」

「え？」

「うーんと、うち出る前くらい」

「ん……？ ああ。バレンタイン、にやーちゃん彼氏とどうするのかなーと思って」

「あ、えつとねえ。実は、別れたあ」

「えつ、そうだったの？」

にやーちゃんがあまりにさりとしたテンポで言うから、ちよつと大きな声で驚いてしまった。

「ん。カナにもうすこーし生気が戻ったら仁愛から話そうと思ってただけだねえ」

「そうだったんだ……なんか」

私ばかり励ましてもらって、と思っただけで、言葉にしなかった。にやーちゃんの横顔は逞しかった。私みたいにならないうじうじ同じ場所に留まっている風ではなく、すでに前を向いて歩き進もうとしている気配すらあって、だから励ますという言葉は不似合いな気がしたのだ。

「元彼、サークルの同期の子でねー。飲み会で盛り上がりすぎて、なんとなくそのまま彼の家に行って、それからなんとなく、なし崩し的に付き合ってたんだだけ」

「ん」

「仁愛いつもそうでき。まあいつか、って惰性から付き合いが始まっちゃって、お互いそんな感じだから、ピークとかくることがもなく、なんとなく終わっていく感じ。でもね、もうそういう虚しいのはやめよう、って決めたんだあ。これからは、大切だって心から思う人と、真面目な関係を築いていきたいのです」

にやはは、とにやーちゃんは気高きネコのごとく、八重歯をのぞかせながら笑う。

「にやーちゃんはずいなあ」

「今までがダメダメだったからねえ」

「そう、きっぱり決意できるのがすごいんだよ」

「ほほ」

冬の気だるい朝日に包まれた電車はゆっくり進んでいく。「そういえば」白い光を受けたにやーちゃんが、はたと思い出したように言った。

「それこそ、前に仁愛が自己嫌悪に陥って、『恋愛わからんっ』ってカナの部屋に泣きついたこともあったねえ」

「あはは、あつたあつた」

3ヶ月ほど前の真夜中。突然、『今から部屋行ってもいい？』というメッセージがスマホに届いた。私はまだ全然眠りにつく前で、明かりに照らされたベッドの中でスマホをいじっていたところだった。すぐさま『OK!』のスタンプを送り返すと、しばらくして控えめにドアがノックされたから「はあい」と小声で返事をした。するとゆっくりドアが開き、

「眠れなくて」

パジャマ姿のにやーちゃんが、そう弱々しく笑ったのだった。

「まあまあ、どうぞ」

私はベッドの上で三角座りになり、その隣を叩いた。そこに彼女が腰を下ろし、最初は何でもないおしゃべりをしていただけで、

「今日、カナの部屋で寝ちやうかもな」

と言いながら、私が返事をするより先にごそごそとベッドの中にもぐり込むにやーちゃんに、私はようやく彼女が酔っているかもしれないことに気づいた。

「どうぞご自由に」

私も毛布のトンネルに足を忍ばせ、にやーちゃんの横に滑り込んだ。ふたり分の重みがスプリングを軋ませる。

「やっぱり、カナといると安心する」

「どうして？」

「このシェアハウスで仁愛と学年一緒なの、カナだけじゃん。見えてる未来の距離が一緒だから、カナの言葉だとほっとするのかも」

「そう？」

「そう」

「にやーちゃん、今日はなんだかしおらしいね」

「仁愛はいっただって奥ゆかしくてしおらしいにや」

「ふふふ」

「ほほほ」

「にやーちゃん」

「んー」

「もしかして、また彼氏と別れた？」

なんとなくそうじゃないかと感じていたことを、私は明日の天気の話をするようななんでもなさで訊いてみた。

「……うん。さっすがカナだあ。まあね、もう終わりかけてたのはお互いわかってたんだけどね。けど、彼が言い出しづらそうだったから仁愛から『別れよっか』って言ったんだ。で、なんかふとさ、こう、失恋が寂しいとか悲しいとかっていうよりね、惨めだなあって思っちゃって。こんな恋愛ばっかの自分が」

天井を仰ぐにやーちゃんが、ぼつぼつと言葉をこぼす。枕元の間接照明の灯りが彼女の表情をなくした横顔に触れ、光と陰をもたらしている。

「にやーちゃんを大切に想ってる人はいっぱいいるよ」

「そうかな」

「うん。にやーちゃんがそれに気づかないで、いつもパパーっとどっか行っちゃうんだよ」

「なあにそれ」

「にやーちゃんはちゃんと愛されるし、愛することのできる人ってこと」

「にやはは。カナは優しいね」

にやーちゃんがごろんとこちらに寝返りを打った。女の子特有の、肌本来のにおいがふわりと香った。わずかに触れ合う足先は、同じくらいあたたかかった。

「ありがとうお、おやすみ」

彼女の、泣いているように笑ってるみたいな呟きが夜に溶けるのを見下ろしながら、私たちはそのまま眠りに落ちていった。

電車はゆっくりと動きを止め、降車のアナウンスが私たちに腰をあげると促す。にやーちゃんとは本当にいろんな話をしてきた。大学のことも、サークルのことも、恋愛のことも。夜、コンビニでお酒とお菓子を買ってきて、うちの近くの公園でただなら飲むのは私たちのお気に入り、そんな怠惰で最高な夜を何度も過ごしてきた。

「さー、今日も働きますかあ」

ふんす！ という擬音が頭上にポップアップしそうな勢いで、にやーちゃんが気合を入れ席を立つ。私たちはなだれ込んでくる乗客との肩のぶつかり合いに堪えながらホームへ降りる。いろんな理由があるのかもしれないけど、降車する乗客を一切待たずしてずんずん乗り込んでくるせっかちな人と、私は絶対に仲良くなれないなあと思ってしまう。

喫茶店は小さな豆電球がささやかに飾り付けられ、店内をあたたかく彩っていた。街がバレンタインイベントに浮かれていると寂然としない気持ちになるのに、この店では全然そうは思わないから不思議だ。オーナーやこの店のお客さんには、素敵な一日を過ごしてほしいなと心から願ってしまう。

にやーちゃんがいつもと同じように、黒板におすすめメニューとゆるいイラストを描いている。デザインが個性的だから、スタンプとか出せばバズりそうだなとい密かに思っている。

「あれ」

「え、カナどしたの？」

私は、黒板に書かれた、Valentineの文字を見つめていた。

「にやーちゃん、バレンタインのスペル、間違ってる」

「うっそ」

「ん、Valentineだよ」

「にやはは、そっか。カナありがと。ずつとこうだと思ってたあ」

にやーちゃんが、そう言って照れ臭そうに頬を掻いた。その時、

「ふたりともお疲れさま。賄いできたよ」

オーナーに声をかけられ、にやーちゃんはさらさらとスペルを書き直し、満足げに指先のチョークの

粉をはらった。

開店準備を終えた私たちには振る舞われたのは、

「グラタン〜っ！」

私とにやーちゃんは休憩スペースで思わず声を揃えて歓喜した。グラタンはこのお店でも上位ナンバーに入る人気メニューで、まかないで出されるのは大変めずらしいのだ。

わーい、とひと通りはしゃぐと手を合わせ、私はあつあつのグラタンをふうふう冷ましながら、ぱくりとした。ホワイソースの深みのある味わいとチーズの焼き加減が最高で、美味しいものを食べた時のどこか官能的な気持ち満ちてくる。はふはふとグラタンを口に運びながら、私はまたも空想にふけっていた。

三通目の問題は、二通目の迷路のカードと一通目の写真を用いないと解けない、まさにラストにふさわしい難問だった。そして導き出されたのは、あの公園”というメッセージ。これが、待ち合わせ場所を指しているのだろう。つまり私は、【バレンタインデーの20時にあの公園】に呼び出されているのだと思う。

よって今夜20時には、すべてが明らかになるということだ。

そしてその、“あの公園”について。おそらく、シェアハウスのそばの公園を指しているのではないかと推測している。“あの”としか説明されていないということは、きっと差出人と私の認識がびたりと一致する公園のことを示しているのだと思う。そうなると、やっぱり三角屋根のあの公園しか浮かばない。

「うちさまでしたあ」

先に食べ終わったにやーちゃんが食器を片しに行く。にやーちゃんは、にやーちゃんなのに猫舌ではなく、あつあつの食事もすぐに平らげられるのだ。

彼女の後ろ姿をぼんやり見送りながら、私は密かに手紙を取り出した。一通目の封筒に入っていた写真を取り出す。ここには入構許可証が写っている。この許可証をうちの大学生がもらう必要はないし、そもそもうちの学生なら守衛さんに渡してもらえないはず。だから、この手紙の差出人は私の大学には通っていない。あれ、それにここに書かれている日付って、たしか……うちにはひとり病人がいたから……。

つまり差出人は、私の大学に通っていないくて、でも先週の土曜日にうちの大学に来てくれて、しかもValentineのスペルが正しく書けた人、ってことになる。

でも、だとすると……と胸の内で言葉を転がしていると、

「カナ、そろそろだよお」

にやーちゃんと呼ばれ、びくんと顔を上げた。私は急ぎ足で残りを頬張ると、きゅつとエプロンを締め直し、オープン間際のフロアへ向かった。

「うあ〜〜つかれたあ〜〜」

19時過ぎ、お店を閉めた途端、テーブルを拭いていたにやーちゃんがぼたんと伸びる。やはり例年通り、バレンタイン当日はお客様の入りは止まることなく、つねに満席状態を維持していた。

「私も足パンパンだよ」

私たちは、慌ただしく働いた体と心を労わり合うみたいになさく笑いあった。

そしてひと息ついた今、これまでの空想の中だけを彷徨っていた事柄が、いよいよ現実味を帯び目の前に現れ始めていた。

約束の20時が、刻一刻と近づいている。

1秒1秒、鼓動は静かに高くなる。

「〜〜〜♪〜〜」

ふいに、にやーちゃんのご機嫌な鼻歌が耳の中に転がり込んできて、つま先に向いていた視線がふわりと持ち上がる。

「にやーちゃん、私もその歌好き」

「いやいや、カナが教えてくれた曲じゃんか」

「あれ、そうだった」

「そだよ。おとといみんな飲んでた時」

「うそ。そんな会話した？ 本気で覚えてない……」

「あはは、だってカナが陽気に歌い出したと思ったら、ばたーんて寝落ちちゃったからねえ」  
「うう、申し訳ない……にやーちゃん、何度も様子見にきてくれたんだよね」

「そだよ。カナ寝相いいよねえ。あんなに酔っ払ってたのに、綺麗に布団の中に収まって。しっかり肩まで布団かけてくれたアキくんは、ちゃんとお礼言っとなきやだめだよ」

「え？」

「え？」

きれいな二重まぶたをぱちくりし、にやーちゃんが私を見上げる。ああ、と彼女が口を開いた時、「お疲れさま。今日は大変だったね。せっかくだから、チョコレートケーキ持って帰る？」

目を柔らかくほころばせたマスターに語りかけられ、話のつぎ穂が折られた。

けれどその続きは、声を潜めたにやーちゃんからの耳打ちによって、すぐに明らかになるのだった。

「二二だから、仁愛、先に出ちやうね？」

にやーちゃんは、どこか甘えた口調でそう囁くと、春の雪のような軽やかさでふわりと体を離し、「マスター！ 仁愛、ひとつほしいですう！」

彼女はにやははと笑ながら、シヨーケースめがけて駆けていく。

ひそひそ話をされた耳が、まだ熱い。

そんなことを聞かされ、平然を保っていたはず私の心の振り子は、今になってぶんぶんと振り回されてしまっている。

「じゃ、お先にい」

ロッカールームで荷物をまとめたにやーちゃんが、下唇をきゅつと噛み締め笑顔を作る。そわそわしている時の表情だ。「はあい……」と私は手をひらひらし、見送る。

20時まであと30分。

その時自分の心は、誰を見つめ、何を想うのだろう。

5

いつもと同じ帰り道を、いつもの3ぶんの1の速度でゆっくり歩く。

私は、「あの公園」に向かっていた。けれど、今すぐ引き返したいという気持ちも同時に存在していて、足取りは軽くない。

今公園で待っているであろうその人のことを、その人の気持ちも、これ以上知るのが、怖い。

ただどそのくせ、早打ちする鼓動は止まない。軽くない足取りは決して止まりはしない。

知りたくて、知りたくない。相反するふたつの感情がずっと胸でぶつかり合っている。

『タイヨウ先輩が運んだって、誰から聞いたの？』

『ああ……いえ、完璧に熟睡してたから、逆に運びやすかったと思いますよ。タイヨウ兄がかついでく  
れて』

「……へ？ ああ、まあ？」

『じゃ、仁愛先に出ちやうね』

様々な記憶が、映画の早回しのように次々と脳裏を流れていく。

『実は、これから約束ができて……今 LINE 開いたらメッセージがきてね。もしなんかあったら報告する……っ』

にやーちゃんが、ついでにこっそり教えてくれたこと。その相手が誰かというのをあえて言わなかったのか、それとも興奮気味の彼女が言い忘れたのかは定かではない。

でも、彼だっただけいなと思う。

『それねえ……運んだの、』

そして今、にやーちゃんの囁きが、耳の奥でくるくる転がり反響している。

『アキくんだよ。すすんで運ぼうとしてくれて。けど、部屋までもうちよつとつてところで力尽きちゃったっていうか。それで、最終的にはタイヨウ先輩がひよいと担いでたみたいだけど、運んだのはほ  
ぼアキくんだよ』

『でも、なんでそんな風に言ったんだろうねえ。照れ隠しているか、もしかしてお兄ちゃんが簡単に抱えちゃったのが悔しかったりして』

にやははと悪戯に笑うにやーちゃんの姿をぼんやり思い返す。  
どの時点で、と問われると自分でも定かではない。

本当は、私は差出人が誰かということに、途中から薄々感づいていたような気もする。  
やっぱりそうだ。

私に手紙を送ったのは、アキくんだ。

じやり、と砂を蹴る音が静かな公園に小さく響く。暗闇の中、黄色い三角屋根だけが明るく浮かび上がっている。

「……手紙、読んだよ」

三角屋根の遊具のすぐそばに佇む猫背の後ろ姿に、私は声をかけた。そして彼はゆっくり振り返る。「カナさん、ちゃんと来てくれてありがとう」

どこか力のない表情で微笑むアキくんが、小さく頭を下げた。彼がベンチに腰を下ろすのを突っ立ったまま見ていると、アキくんが隣にコン、と缶コーヒーを置いた。

「少しぬるくなっているかもしれないませんが、どうぞ」

雨粒みたいにぼつりとした声で、彼が呟く。「ありがとう……」私はどきどきしながら受け取り、隣に腰掛けた。アキくんの手の中にも同じものがあり、彼が静かに口に含んだ。手のひらのコーヒーマスは温かい。外灯が落とすふたりの影は少し遠い。

「あんな風な書き方をして、すみません。なんというか、とにかく一度ふたりに話をしたかったです」

アキくんがそう話してくれるけど、彼の中で咀嚼された言葉は、私にはいまいちうまく飲み込みめない。

「……僕だって、わかってましたか？」

「なんとなく……ね。にやーちゃんは、バイト先でバレンタインのスペル間違っって書いてたし、一通目の手紙に入ってた入構証の日付のとき、タイヨウ先輩はインフルで部屋にひきこもってたし。そうなるよ、やっぱりアキくんなのかなって……」

「……そっか。それはよかったです」

お互いに、一度口を開いては「……」という声にならない声が宙を彷徨い、それからやっと言葉を紡ぎだす。私たちは、どうも緊張しているらしい。

「……もし、カナさんが解けなかったら、もしくは解かずに放ってしまったら、すっぱり諦めようと思つてました。賭け、というか、運試しというか」

「……どうして？」

「僕、まだ高校生ですよ？」

アキくんが、にこりのない声でそう言い放った。ずっと交わらないままだった視線が、がちりと重なる。

彼の、華奢な体躯に比べ、まだ幼さの残る丸みを帯びた男子高校生らしい輪郭が、外灯の光に照らされている。

高校生、という彼の言葉がより現実的な重みを持って私の心に沈んでいく。アキくんは、私の大学に隣接している付属高校に通う、まだ高校二年生の男の子だ。

「子供扱いされて、呼び出す以前にあしらわれてしまうんじゃないかって危惧していました。だから、唯一対等でいられる謎解きに全てを賭けてみたかった。謎解きしている時間は、なんだか同じ視線でいられる気がして、嬉しかったんです」

「……うん」

彼の言う通りといえばそうであって、アキくんとは私はずいぶん歳が離れているし、周りがそう言うように、姉弟のような関係性だと感じていることは否めない。

「前に、ライブに誘ってくれたじゃないですか」

「えっ、ああ、うん」

「全然知らない曲ばかりだったけど、すごく楽しかったです。曲もすごく良くて。あれ以来よく聴くようになりました」

「そうなんだ。気に入ってもらえてよかったよ」

「それで、その帰り道にこの公園で話したこと、覚えてますか？」

やはりその記憶と結びついてたのか、と納得しながら「うん」私は頷く。

「……父親が再婚して、僕はそのことに関してとくに賛成も反対もなかったんですけど、やっぱりいざ一緒に暮らすとなると、心がうまく追いつかなくて。僕、小学6年生までは生みの母親と暮らしてたので、余計に」

「うん」

あの時のアキくんの言葉がそのまま蘇る。

『……義母は、いい人なんですけど、急に新しい母親ですって言われても、うまく受け入れきれないし、どう接したらいいのかもわからなくて。それで、周りにきつく当たったりしてしまって。そういう自分も嫌で、早く家を出たいと思ってたんです』

アキくんがまた缶コーヒを傾ける。白い喉がごくりと上下する。そういえばあの時もここで、自販機で買った缶コーヒをふたりに飲んだような気がする。

「こんな話、あんまり人にしたことなかったんですけど、ライブの後で気持ちが高揚してたせいもあってか、カナさんに吐露してしまつて。呆れられるかなと思つたんですけど、カナさん、『別に、今はそれでいいじゃん。かっこいいと思うけどな。それに距離や時間にしか癒せなかったり、解決できないし、これもあるしね』つてさりとて言うから、なんだか拍子抜けしたというか」

「……いやだつて、そうやってちゃんと自分のこと理解してて、はつきり意思を通せるのがまずすごいと思つて。私は、思つても言えないまま飲み込んだり、伝えたくてもうまく言葉にできないことが多いから」

「はい、それも言つてましたね。僕はあの時、カナさんがくれた言葉に救われた気がしたんです。やっぱり自分の選択に対して、どこか父親や義母への後ろめたさとか、罪悪感のようなものは少なからずとも感じていました。でも、あの時は感情に任せて家を出ただけで、実は離れることで、冷静に問題と対峙できるかもしれないんだ、つて思えたことが救いだつたというか」

「そんな風に考えてくれたとは……」

やっぱり大人びてるね、と口先まで出かけたのを、私は喉の奥に戻した。飲み下した言葉がより鼓動を高くさせる。いいや、彼は高校二年生なのだ。

「カナさん、本当は彼氏さんと一緒に行くのを楽しみにしてて、『可愛い文句のひとつくらい言えればよかったのに、それも言えなかった』つてちよつとグチをこぼしてて」

「あ、ははは……」

そうだ、私もライブ後の興奮を引きずつていて、ついつい話を聞いてもらつたのだった。アキくんは歳が離れているからか、なんでもつらつらと話してしまふ。

「それから、僕に彼氏さんの好きなどころを語つてくれて」

「うわ、私完全にめんどくさい奴じゃん……！ しかも彼、そういう女の人嫌いなのにね。惚気話ばかりする人は恋愛しか頭がないみたいで聡明じゃない、つていつか言つてて。だから、あの人の前ではそんな素振りは見せないようにしてたんだけど、」

それでも、うまくいかなかった。彼が言う“聡明”でありたかつたのか、今だつて分からない。

「僕は、彼氏さんをすごく羨ましいと思ひましたよ。そんな風に、顔じゆうに“好き”つて殴り書きしてあるかと思うくらい、分かりやすく想つてもらえるのつて素敵だなつて」

「え、へっ……」

ふい突かれたときの素つ頓狂な声が出てしまふ。慌てて二の句を継ごうとする私より先に、またアキくんがとつとつと話す。

「でも同時に、すごく苦いような気持ちにもなつたんです。不快とも違ふ……苦しいような、痛いような」

いつもより饒舌なアキくんは、私はほとんどん恥ずかしさがこみ上げてきて、また顔を背けてしまふ。話と話の合間の静寂に耐え切れない。手持ち無沙汰を誤魔化すみたいに、私はもらつた缶コーヒーを開け、ひと口含んだ。微糖のコーヒーは、想像以上に甘い。

「その夜をきつかけに、自分はカナさんのことが好きなんだつて気づきました。それに、家のことにもきちんと向き合うようになって。それまでは義母からの連絡もおおざなりにしがちだつたんですけど、向こうが歩み寄ろうとしてくれるのに、こっちが逃げてばかりじゃいけないと思うようになって。少しずつメールや電話なんかでの交流も増えて。それで少し前に帰省してました。ちよつと話をするために」

「えっ、ああそうだったんだ」

「はい。父親からも話がしたいと言われていて。実は……父が東京の本社への移動が決まつたみたいで。東京と一緒に住まないか、という話だつたんです。義母……いえ今の母親も、同席していました。

『あなたがどうしても拒むなら仕方ないけれど、私は一緒に暮らしたい』そう言つてくれて、僕、なんだかすごく優しい気持ちになれて、嬉しくて。母の真摯な言葉もそうなのですが、僕自身が、受け止めるんじやなくて、ようやくきちんと受け入れることができた気がして」

「えっ、じゃあ……」

「はい。僕は、来年にはシェアハウスを出て、家族と暮らすことにしました。だから、ここを退居する前に気持ちを伝えようと思つていたんです。たとえカナさんに恋人がいても。だけど、思いがけず彼氏さんと別れたという話を聞いて、めっちゃめっちゃ嬉しかったんですけど……でもすぐに言い寄るのもいやらしい気がして、密かにタイピングを探していました。でも、別れようが別れまいが僕が奪つてやりたかつた。自分のほうが絶対にカナさんを大切にする自信があつたから」

アキくんがあまりにあつさりした調子で、溶かした角砂糖のようなことを言うから、私は漫画みたい

に盛大にコーヒを吹き出してしまった。「でも、いざとなるとヒョって特殊な手紙書きちゃいましたけど」アキくんが頭の裏をかく。私はあほのようにむせる。

「……っ、あれ、でも、アキくん彼女がっ、」

げほげほ、息が苦しい。

「だ、大丈夫ですか？ 彼女……とは」

「なんかほら……、いつもキャンパス横切るときとかよく一緒にいる、髪の毛長くて、可愛い感じの……た、タイヨウ先輩のバイト先の後輩って言った、」

げほげほ、私は何を必死になっっているんだろう。息が苦しい。

「ああ、ずっと相談受けてたんです。タイヨウ兄が好きだって。だから、いつだったかタイヨウ兄に關係を突っ込まれたときは、焦ってしまいました。不意打ちすぎて、うまい返しができなくて」

「そだったんだね……」

けほけほ……今のは嘘の咳だ。だってそうでもしないと鳴り止まない鼓動の音がうるさくてしかたない。息が、胸が、苦しい。

「ああそういえば、タイヨウ兄が気合入った顔して家出て行っちゃったけど」

「……あ、はは、そっか」

アキくんの言葉に、バイト先をいそいそと出て行ったにゃーちゃんの緊張した横顔。パツとよぎる。火照る心臓に微笑ましい思いが触れたのも束の間、こちらをじっと見つめてくるアキくんと視線が重なり、私は反射的に体を後ずらせてしまう。同時に、ぱしゃつと液体が跳ねる音がした。

「はは、こぼしちゃった……」

勢い余ってあふれ出てきてしまったコーヒが、手の上をとろりと濡らしている。

「大丈夫ですか？ ハンカチとか……ありますか？」

「う、うん」

あせあせとカバンの内ポケットに手をつ突っ込み、ハンカチを探す。コーヒを吹き出したりこぼしたり、どうたって落ち着かない。

その時、指先に何かが触れた。あれ、何を入れてたんだっけ。私は手元をハンカチで拭いながら、それを取り出す。

「……ああ」

それは、小さな貝殻をぎつしり詰めた、親指サイズほどの小瓶だった。手にとって思い出した。あの人と初めて遊びに出かけた海。はしゃいで、嬉しくて、腕に飛びつきたくて、でも先を歩くあの人の手を伸ばせなかった。それでも初デートがとびきり楽しくて、私は砂浜のきれいな貝殻を集めて持ち帰り、しかもそれを小瓶に詰めて持ち歩いていたのだ。長くカバンに入れたままになっていて、いつしかカバンに忍ばせていたことも忘れていた。

昨晩見た夢の中、あの人は、砂に足をとられ転びそうになった私の手を引き寄せてくれた。

だけど、その部分は事実じゃない。夢の中ではそう、いうものとして眺めていたけれど、実際の記憶では、すたすた先に行く彼は気づかず、「あっ」と尻もちをついてこぼした声で、あの人はようやく振り向いてくれたのだった。

手をとってくれたのは、アキくんだった。アキくとライブハウスに向かう道の途中、バンドのことについてべらべらと熱心に説明するあまりに、迫りくる自転車に気づくのに遅れた。すぐにハツとし避けられたものの、私はその勢いのままぐらりとよるけてしまった。けれど、いつだって肩を並べて私の話を聞いてくれる彼が、瞬時に腕を掴み助けてくれたのだった。

「そだったなあ……」

「えっ、なんですか？」

誰に届けるでもない私のひとりごと、アキくんはしっかりと拾ってくれる。

私は小瓶のふたを開け、小瓶の貝殻をすべて両手のひらに集めた。

『貝殻も貝の屍骸なんよなあ』

せつせと貝を集める私にあの人が言った。あの時は、「斬新な考え……」なんて胸をときめかせたものだけど、今思えば、「綺麗！」と嬉々として貝殻を拾う人にかける言葉にしては少し優しくない気もする。が、なんだかもうどうでもいい。私は立ち上がり、バレーのレシーブするみたいに、両腕を下ろした。

そして次の瞬間、

「えいっ」

その、きらきら光るきれいな過去の亡骸を、私は思い切り空に放った。白、ピンク、黄色、青に光る小さな貝殻たちが夜空を泳ぎ、地面へと舞い散る。

その時、私を縛っていた糸がするりと解け、ずっしりと重たかった心が、ふわあと水面に浮かび上がっていくような気がした。

「アキくん」

「えっ、はい……!!」

「私バイト先でケーキもらったんだ」

高校生で、こんなにも歳下で、私は、やっぱり怖い。歳の差って魔法みたいなもので、とくに男の子が下の場合、解ければあつという間に我に返ってしまったりする。だけど、

『僕が奪ってやりたかった。自分のほうが絶対にカナさんを大切にする自信があったから』

私はこの言葉に、完全くらってしまった。そんな不安もかき消してしまうくらいの威力があったのだ。私の心の振り子は、今しっかりと彼に掌握されてしまっている。

「あ、えっ、ケーキですか……?」

私もチョコレートケーキをひとつ頂いた。バレンタイン仕様のハートのプレート付きだ。唐突な話題

に少し戸惑っているアキくんは、ふつと微笑まじさが込み上げてくる。

「ひとつしかないんだけど、帰ってふたりで食べよう。私、アキくんのためにおいしいコーヒー淹れるよ」

望んでくれるなら、これから先もずっと。「……えっと、はい……!!」なんだかよく分からない顔をしているアキくんがものすごく可愛いらしくて、胸の真ん中をきゅんとつねられる。その戸惑った顔をずっと見ていたい気もするけど、でもうちに帰るまでにはちゃんと、私の想いも伝えようと思う。

私、君のこともっと知りたいよ。  
ふと、手の中の缶コーヒーが、さっきよりすっかりぬるくなっていることに気づく。外灯が落とすふたりの影は、さっきよりもずいぶん近づいていた。

了

本作品の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信する事は、固くお断りしています。